広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語の談話におけるあいづちの研究
Author(s)	アラジョワ イレナ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1993 : 67 - 77
Issue Date	1994-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039349
Right	
Relation	

日本語の談話におけるあいづちの研究

アラジョワ・イレナ

1. はじめに

会話は話し手と聞き手がいて、成り立つものである。テレビやラジオの番組や、講義はどの場合、聞き手が不特定多数であるとき、話し手が一方的に話して、聞き手が受身で情報を受け止めるという固定した形になる。しかし、日常の会話や談話の場合、聞き手が話し手に対してもっと積極的に働きかけるという傾向が見られる。聞き手が話し手の問や意見に応じたり、同意あるいは異なった意見を述べたり、同情や驚きなどいろいろな感動を表したりする。その聞き手の応答は話し手の次の発話に影響を及ぼす。このよな形で会話が成り立って発展していく。会話の場合だけでなく、一般的に言語コミュニケーションおいて聞き手の言語行動が重要な役割を果している。その言語行動の一つの要素があいづちである。あいづちを打つことによって話の進行を助けることもできるし、話の転向を促すこともできる。あいづちの上手な使い方によって、話の調和だけではなくて、話し手と聞き手の良い人間関係を保つことができる。逆に、あいづちがあまり必要ではない瞬間にあいづちを打ったり、あるいは何の反応もしなくて、黙って話し手のことばを聞くと、会話の流れを妨げるおそれがあり、誤解も生じるかもしれない。あいづちは会話という人間のコミュニケーションの現象の重要な要素である。いろいろな調査を見るとあいづちは日本語の日常談話には非常に頻繁にあらわれるということがわかる。要するに、あいづちは日本語の話しことばの表現の特徴としても考えられる。だから、あいづちの概念、あいづちの様々な種類、会話の中の機能や話しことばの特徴としての言語的・文化的背景の研究は非常に興味深い。特に外国人日本語学習者である私の場合には、このような研究を通じて、理論的な日本語の知識を深めるだけではなくて、実際に日本語の会話の様式を把握し、会話のやりかたを身に付けることにも役に立つと思うわけである。

2. あいづちと外国人日本語学習者

「対話」とかdialogueという語があるように、話は話し手と聞き手の間で交わされるものである。外国語でも、一人が何か言えば他の一人がそれに答えるという形をとることは、普遍的であろう。それは外国人にとっても十分に理解できる。しかし、水谷(1984)が示しているように、外国人を特に困らせるのは、話し手の文の途中ではあいづちを打つ習慣のことだ。相手の話の途中で「ええ」、「ふん」のようなあいづちを入れるのは日本人にと

(2)

ってごく当り前のことのように思われる。このあいづちは相手の話を聞いているという信号のように働く。特に自分の話にあまり自信がないとき、聞き手のあいづちによって勇気づけられたり、助けられたりすることが多いと水谷修(1979)が述べている。しかし、外国人が話す場合には、相手の日本人が話を助けようと、「ええ、ええ」などと連発すると、これを「もうわかった、やめてくれ」という意思表示ととって、沈黙してしまったりすることもある。あいづちを「interruption」、「中断」、「邪魔」のように解釈する外国人が少なくない(水谷1988)。もちろん、外国人の中には、様々な人がいて、個人差もあって、一律に言うわけにはいかない。しかし、英語圏だけではなくて、欧州諸国場合でも、相手が話しおわるのを待ってから口を開くのが礼儀だと考えられている。したがって、何の予備知識もなしに日本人のあいづちに遭うと、拒絶反応を起こすのが大部分であると水谷が指摘している。　もう一つ、量的に頻度の高さという点で日本語のあいづちはかなり特殊なものだと考えられる。これは外国語との比較対照からわかる。メイナード(1987)の日米会話におけるあいづちの調査によると、60分のデータであいづちの総数は日本語の場合の871対英語の場合の428であった。英語では、一般的に会話の中であいづちはそんなに頻繁に現れないという事実がわかった。そして、文の途中ではなくて、相手の発話が完全に終わってから「yes」とか「right」とか「so?」のようなあいづちを入れるのが普通であるとメイナードが述べている。しかし、日本人と話すとき、相手の話を黙って聞いていると、日本人がたちまち不安になって「日本語をわからないのか」「私が言ってること理解できないのか」と思ったり、話をやめてしまったりもする。次のような電話での会話は誰でも想像できる

日本人「もしもし。」
外国人「もしもし。」
日本人「えー、こちら、あのう山本ですが。」
外国人「. . . . .」
日本人「もしもし。」
外国人「はい。」
日本人「こちら、山本ですが、ジョンソンさんは. . . 。」
外国人「. . . . .」
日本人「もしもし。」

(水谷(1979)からとった例)

書いた文章なので、イントネーションを正確に表すのは難しいが、普通は「山本ですが。」の後は、音調は平らにひきのばされ、相手から「はい」「ええ」「はあ」などのあいづちを期待しているわけである。外国人の方は、文が途中であると判断したので、黙って聞いている。日本人は音が返ってこないので不安になって、「もしもし」で相手が聞いている

かを確かめようとする。外国人がこれを聞いて、「はい」と応じる。しかし、日本人の次の発話も不完全な文なので、外国人がそれに対して応じようとしない。

この例を見ると、特に会話は電話で行われる場合、あいづちの重要性が目立つ。電話で話す時、話し手と聞き手が顔を合わせることができないので、コミュニケーションをサポートする非言語的信号（例えば、うなずき、笑い、顔や目の動き）が送られない。相手が聞いているか、コミュニケーションがとれるかの確認は、あいづちだけで得られる。かなり日本語を学習した場合でも、あいづちの自然な使い方に慣れていない外国人にとって、電話のかけかたは非常に難しい。水谷(1988)が指摘しているように、外国人が日本語のあいづちに対して抱く誤解は、あいづちを実質的な応答と考えられる傾向が見られるからである。あいづちとして使われる「はい」「ええ」「うん」などを、「賛成」の意味のようにとられる場合が多い。あいづちの実体を知らない外国人の場合、相手が頻繁に「はい」、「はい」と言うのを聞いて相手は自分に賛成していると思ってしまい、最後になると相手がかならずしも賛成していないのがわかって、がっかりする。日本語の「はい」は英語の「yes」で絶対的におきかえることができない。「yes」の主な意味と機能は肯定だが、「はい」は違う。奥津(1988)の「はい」の機能についての調査を参考すれば、日本語の会話の中に相手との賛成を表す「はい」、つまりYes-No疑問文に対する応答としての「はい」の使用率は8.3%だけを占める。肯定の意味の他に、「はい」はいろいろな意味や使い分けがある。相手の話を聞いているという「はい」の機能は、会話の中には驚くほど頻度が高い。あいづちとしての「はい」の使用率は40.5%である。つまり、会話においては、相手の発話を肯定的に受け取っているという信号を送るのは大切であると奥津が主張している。しかし、この「はい」は相手の意見に賛成だという意味ではない。あいづちの「はい」は、「yes」ではなくて、「uh-huh」とか「yeah」で訳すのが妥当であろう。Maynard(1990)が指摘したように、会話の中の「はい」は重要な社交的な機能（social function）がある。

あいづちを打っている聞き手が本当に話の内容を理解しているかどうかということは、別の問題である。教室で授業をしていて、非常によくあいづちを打つ学生がいるが、試験をしてみるとその学生は話の内容を全然理解できていなくて、非常に悪い成績をとったりする。したがって、あいづちを打っている聞き手の言語行動は、けっして100パーセント「yes」の意味で、言われたことが理解でき、それに賛成するという意味で使われるわけではない。聞き手が「はい」ということばをあいづちちして使うときは、相手が言ったことの正しさを認める、相手の主張の妥当性に賛意を表明することにはならないのである。『話そうとしていることに対して、それを認め、話の進行を促す信号にすぎないのである。』（水谷修(1979)。あいづちの「はい」は、儀式的な機能(ritualistic function)を果しているとMaynard(1990)が論じている。だから、「はい」の意味が「yes」に相当するという教え方、学習のしかたのために誤解が起こる潜在てきな可能性があると思われる。

3. あいづちの概念

あいづちには、「うん」「はい」などのような言語形式をとるものと、頭の動き（首の縦振り・横振り）、笑いなどのように非言語形式のものもあるが、本稿は言語形式のものだけを対象とする。あいづちと言うと、まず頭に浮かぶものは「ええ」、「うん」のような短い表現だが、実際にはあいづちにはたくさんの種類がある。果して、あいづちの実体はどんなものであろうか。メイナード(1987)が指摘しているように、会話の流れのなかで、どの言語行動を聞き手のあいづちと見なし、どれを話し手の発話順番（speaker's turn）と見るかは簡単なようが複雑である。あいづちの概念について応答表現の基礎的な分析に触れてみたい。

宮地敦子(1959)は、ことばの「やりとり」の緊張関係における話し手の前詞に対しての聞き手の＜うけこたえ＞の態度や形式について論じている。まず、＜うけこたへ＞の態度の型として①黙（黙殺する一無言ではない一場合）、②応（前詞に応じた表現をする場合）③転（前詞を機縁として話題を転じる場合）、④断（「じゃあ」などと前詞をそれきりで断止しようとする場合）の四つの型に分類している。このうち①、④は現れることが少なく、②が大部分を占める。このことから、さらに②を応受（「はあ」「ふんふん」と聞き手であることを示すにとどまるものである。話し手の発言を受け止め、一応理解したことを示すが、自分の感想や意見は表明しない。普通は下降調をとる。）、応促（「そして？」「で？」などと聞き手であることにとどまるが、発言を続けさせるのに積極的な態度を示すものであり、応受を前提としている。大体上昇調をとる。）、応答（前詞に対して肯否の表明を示すものである。肯定的な応答の場合には話し手は目指す方向に話題を発展しやすいが、否定的な応答の場合には話し手は応答の方向にしたがって話を進めていく場合が多い。）、応述（前詞の態度や内容にのっとって自分の意見や感想を述べる。）の四つに分類している。応受も応促も前詞が言いきりにならないうちでも、息一その他の標徴一の切れ目には随時挿入ができ、同一主体内の表現における間投詞的位置や意味を占めているとしている。応答は前詞が言い切りになったときに現れるはずのもので、同一主体の表現における感動詞とも通じるところがあると宮地が述べている。応述については『うけこたへの域を脱して与手になろうとしている．．．（中略）．．．が、前詞からの絆が絶たれていない。』としている。しかし、否定的な応述は聞き手の方向に話を進める一『話の主導権を握る』ということである。

この同一主体内、または『話の主導権を握る』というのは、聞き手のある言語行動があいづちであるかに対しての判断の基準として考えられるのは妥当であろう。Maynard(1989)もあいづちの定義について論じている。あいづちのような表現も実質的な意味を含んでいて、相手がそれにはっきり反応を示すものもあるし、文の形をとるかなり長いコメントの場合にも、根本的にはあいづちのようなものもあると指摘されている。Maynardのあいづち

の定義はYngve(1970)の言うバックチャンネル(back channel)のアイディアに基づいている。Yngveによると、バックチャンネルというのは話し手が「yes」とか「uh-huh 」のような短いメッセージを、自分の発話権をゆずらずに聞き手から受け取るとき認められると定義している。

この二人の著者が論じているように、あいづちであるか否かに対してのはんだんの基準は、あいづちの形式やメッセージの長さではなくて、話の主導権と関係がある。話し手が発話権を持っている間、聞き手の反応やコメントはあいづちとして認めることができる。逆に、聞き手が発話権を握ろうとするとき、その聞き手の言語行動はあいづちではないとも考えられる。

4. 会話の中の機能

聞き手のコミュニケーションへの参加はあいづちによって行われることが多い。あいづちはどのような機能を果たしているのだろうか。

堀口純子(1978)は、聞き手の言語行動のうち、あいづち、先取り、確認を取り上げ、その機能と形態について考察している。あいづちの機能としては、

①聞いているという信号
②理解しているという信号
③同意の信号
④否定の信号
⑤感情の表出

の五つの信号として捉えられている。Maynard(1989)のあいづちの機能の分析を見ると、だいたい同じ機能が挙げられている。以上述べていた五つの信号とそれぞれに現れるあいづちの形態について詳しく考えていきたい。

①聞いているという信号

聞き手は、話し手の言うことがよくわからなくても、あるいは話し手の言うことに同意ができなくても、聞いているという信号を送ることがある。これによって、話の流れを促すことができる。例えば、

A:あのさ。
B:うん。
A:あの一年生の女の子がいるでしょう。
B:うん。

他に聞いているという信号として使われるあいづちは、「ふうん」、「ええ」、「はい」などが挙げられる。聞き手は相手が話そうとしていることを認める。このような聞き手の反応は、特に会話の始まりには頻繁におこる。

②理解しているという信号

聞き手は話し手の言うことを聞いて理解したという信号を送ることがある。聞き手がそこまでは理解しているということがわかれば、話し手が安心して、話を進めることができる。しかし、理解というのは、聞くことが前提にあるから、理解しているという信号と、聞いているという信号は、区別がはっきりつけられない場合も多いようだ。たとえば、①に挙げた例には、Bの二つ目の「うん」を理解しているという信号としても解釈できる。もっと積極的に理解を表すあいづちとして「そう」、「そうですか」、「そうですねえ」、「やっぱり」、「なるほど」のようなものも挙げられる。

③同意の信号

聞き手は、話し手の言うことを聞いて理解し、さらにそれに同意だというしんごうを送ることがある。聞き手が自分の話に同意しているということがわかれば、話し手は理解の信号以上に話が進めやすくなる。しかし、同意というのは、聞いて理解して初めてできることであるから、これらの信号とはっきり分けられないこともある。例えば、

A:カラスってね。
B:うん。
A:すっごく人間くさいんですよね。
B:うん。

ここにおける聞き手の「うん」は、聞いているという信号とも、聞いて理解したという信号とも、聞いて理解して同意だという信号とも取れる。同意の表現として現れるあいづちは、話し手が発話の終わりに、文末詞の「ね」、助動詞の「でしょう」、「だろう」のようなもので聞き手の意見を求め、聞き手がそれに応じる場合もある。

④否定の信号

肯定的なあいづちより否定的なあいづちは会話の中にめったにあらわれない。奥津(1988)が述べているように、我々は会話の相手との関係を、できるかぎり肯定的に友好的に保とうとしており、これは会話の原則のようなものである。しかし、話し手の言うことを聞いて理解したが、賛成ではないという信号を送ることもある。丁寧さの原則にしたがって、ほとんどの否定的なあいづちは直接的な否定ではなくて、間接的に現れることが多い。

「さあ」、「まあ」、「たぶん」、「そうですかねえ」、「そうかなあ」などのあいづちは、話し手の言うことに対して疑問、不一致、意見の相違を表すことができる。

この否定の信号が強いとき、話し手はまずそれに対処しなければならない。話の進行も予定していたのと違う方向に変えざるをえないこともある。この否定の信号のようなあいづちの機能は、話の方向転換を促す機能としても考えられる。

⑤感情の表出

聞き手は、話し手の言うことを聞いて感じた驚き、喜び、悲しみ、怒り、同情、いたわり、謙遜などいろいろな感情をことばで表すことがある。これによって、話し手は聞き手が心理的にもコミュニケーションに参加しているということがわかる。「で」、「そして」のようなあいづちで聞き手は自分が話に興味があるということを表し、会話の進行を促す。この聞き手の反応をもとにして、話し手はさらに話を発展させることができる。

5. 談話内での位置

あいづちはどこで打たれるのだろうか。なんの決まりもなく好き勝手に打たれているのだろうか。そうではないことはすぐに思い当たるであろう。不適切な位置に打たれたあいづちは、コミュニケーションをスムーズにするどころか、かえって話を立ち止まらせ、邪魔をすることになってしまう。同じように、打たれるべきところにあいづちが打たれないと、やはり話が途切れてしまうようなことがある。適切な位置に、適切な形のあいづちが用いられてこそ、あいづちはその機能を果たすのである。

水谷信子(1983)は、実際にどのようなあいづちがどのような頻度で打たれているかを録音資料から調査している。そこであいづちの頻度は一分間に平均して15～20回であったことがわかる。そして個人差や相手との関係、場面などによる違いがあると述べている。同じ人が違う相手にあいづちを打っている場合、相手によって頻度が違っているので、相手の話しかたの速さを一分間に何音節というように計ってみると、相手が速く話せばあいづちの回数も増えるという形になる。あいづちとあいづちの間の長さ、普通、音節にして、14～26、平均20ぐらいだという数字が得られている。『あいづちは、ある程度のまとまりのある句のあとで打たれるものであるから、あいづちとあいづちの間の音節数が、話しことばの句の長さになる。』と述べられている。20音節のぐらいの長さは、ちょうど一息に話せるぐらいの長さである。あいづちは『話しことばのコンマ』のようにも考えられる。

メイナード(1987)の行った調査のなかでは、あいづちの80.71%が発話中の短いポーズ付近、または話のリズムにあきが見られた時におきている。そして、終助詞を伴うポーズにおきたものは40.84%であったと述べられている。文節や文末のあとで打たれたあいづちは、聞いている・理解しているという機能を果している。終助詞の後あいづちが送られている

場合が多いので、終助詞についてもっと詳しく考察してみたい。

あいづちと同じように、終助詞は日本語の会話の特徴の一つとして考えられる。終助詞は、話し手と聞き手のコミュニケーションにもっと親密なニュアンスをもたせる。終助詞の「ね」について『A Dictionary of Basic Japanese Grammar』(1986)を引いてみると『話し手が聞き手に共有の知識についての確認や同意を要求する』と説明されている。「ね」は話の中の聞き手の参加のためのゆとりをあける。伝えられている情報は話し手にだけではなくて、聞き手にも属することである。「ね」は話し手の発話を和らげ、友情的なニュアンスをもたらす。「ね」は同意を求めているので、これに呼応あうづちは「うん」や「そう」のような理解を示すものである。

同じように終助詞の「の」についても『A Dictionary of Basic Japanese Grammar』で調べてみると『説明や感情的な強調を示すのに使われる』。また、「よ」について引いてみると『話し手だけが知っているようなことについて、強い確認と主張を示したりする』と書いてある。「の」も「よ」も話し手が聞き手の知らない情報であると確認できる情報を聞き手に伝える。そのために、終助詞の「の」や「よ」に呼応するあいづちは、同意を示したものより、意見・感情を表すものである。

話し手が発話の終わりに「よね」を使う時も、あいづちの反応が見られる。「よね」は『話し手は文の内容があたかも聞き手にも知られているかのように話すことによって、主張を和らげようとする』(『A Dictionary of Basic Japanese Grammar』)。助動詞の「でしょう」も「ね」と同じように、確認や同意を聞き手から要求するという意味を持っている。「ね」と「でしょう」に呼応して起こるあいづちは同意を示すような形で現れる。

このように談話内でのあいづちの位置について見ると、あいづちは話し手が発話権を行使している間に送られるのではなくて、ある決まったコンテキストが認められた時、送られるものであるということがわかった。聞いていることを示すものはほとんど文の終わり、あるいは文節の終わり、話し手が話の間をとる時送られる。あいづちは、話し手の要求に応じて打たれていることになり、また話し手の意図によってあいづちの種類も限定されている。このように、話し手の言語行動が聞き手のあいづちを促すためのコンテキストを作り出すと、聞き手がタイミングよくあいづちを入れることによって、会話のリズムが保たれていく。つまり、あいづちは、会話の流れの中であいづちを送るべき瞬間に送られることによって、会話上の機能をもっと有意義に満たすことができるとも言える。

6.あいづちの日本文化的な背景

ここまで述べたあいづちの特徴や話の中の機能を見ると、日本語の談話のパターンの一つを見つけることができる。日本語の談話では、聞き手の言語行動が大切であり、聞き手が頻繁にあいづちを打ち、相手の言ったことを確認し、補強し、時には相手の文を完成する。

つまり、積極的な聞きかたが社会的・文化的に認められた基準とも言える。会話は、話し手と聞き手が一緒に作っているものだと考えるのは妥当であろう。水谷信子(1988)が指摘しているように、頻繁なあいづちを必要とする話し方、あるいは聞き手が話の流れを作る作業に参加する話し方は、『話し手と聞き手の区別のない話し方』である。このような話し方は、対話という二人の人間がそれぞれ独自の流れを形づくる話し方とは違って、共同して一つの流れを作るものである。この点で、あいづちを伴う話し方は対話ではなくて、『共話』と呼ぶべきだと水谷が論じている。

言語と民族の文化の相互関係という考えは、昔からいろいろな言語学者が論じている。この依存関係の内容は、①言語は民族の文化を反映する。②言語は民族の世界観を決定するということである。この節はサピア・ウオーフの仮説として知られている。日本人の一人で話さない話し方、『共話』の話し方は、日本文化のどのような面を反映しているのであろうか。

日本文化『察しの文化』、『いたわる文化』とよく呼ばれたことがある。あいづちはその文化の特徴の一つである。あいづちを頻繁に打つ話し方に、良い人間関係への志向が見られる。水谷信子(1988)が示しているように、『あいづちは人間関係への考慮の表れである。』。

話し方の特徴に、その人々の人間関係に対しての価値観が反映されている。日本人にとって、相手を困らせる、傷つける、恥をかかせるような行動は、何によりも避けるべきなのだ。Lebra(1976)が論じているように、相手に対しての『思いやり』は本当に日本人にとって価値のある美徳である。Lebraは、日本文化を『思いやりの文化』と呼んでいる。

『"Omoiyari" refers to the ability and willingness to feel what others are feeling, to vicariously experience the pleasure or pain that they are undergoing and to help them satisfy their wishes. Kindness or benevolence becomes "omoi-yari" only if it is derived from such sensitivity to the recipient's feelings.』

あいづちは、相手の言うことについて理解や同意を示している信号として、相手を勇気づけたり、いたわったりする機能を果たしている。あいづちは『思いやり』の表れの一つとして考えられる。

水谷修(1979)も日本人の話し方の特徴について考えている。話し方に対して二つのモデルが挙げられると論じている。一つは、その社会に属する人達が同じ「考え」を持っている、あるいは同じ「考え」を持とうとしている。もう一つは、その社会に属する人々は異なった「考え」を持っている、あるいは持つはずだと考えているものである。もし、社会の人々の「考え」が同じであるなら、そこでは話し手は相手との考え方の差異を明確にし、妥協の道を見つけ出すための努力をする必要はない。しかし、「考え」が同じであっても話すことがないわけではない。お互いに同じであることを確認しあったり、心の通じあいを喜ぶここには十分な意味がある。『「考え」の差異について論じることよりも、同じで

あることを確かめあう話や心の交流や人に対する心の態度を示す話に重点が置かれることになる。』

この二つのモデルは、きわめて単純化した形で挙げられているが、どの話し方のパターンが圧倒的に現れるかによって、現実の社会にあてはめることができると水谷が論じている。日本の社会は『同一型優先の社会』のように考えられる。『日本語は、話し手の意見や事実との関係を重視するよりは話し手や聞き手の感情や人間関係に対してより敏感な構造を持っていると言うことができる。』

この文化的な背景を考えると、日本語の会話に現れるあいづちの非常に高い頻度を説明するこができる。相手をいたわる話し方、相手とのよい人間関係や心の交流を保とうとする話し方においては、あいづちは不可欠の要素である。

この研究では、あいづちの概念、話の中の機能や位置について考えてみた。あいづちは日本語の談話の特徴の一つなので、私自身に取って興味深くて役に立つ研究だったと思う。日本人の言語学者のあいづちに対しての本格的な興味もその重要性を示している。これからも、言語的なあいづちだけではなくて、非言語的なあいづちについて、そしてあいづちと日本文化の関係についても興味深くて他面的な研究を期待している。

参考文献

1.奥津敬一朗(1988)　「応答詞『はい』と『いいえ』の機能」　『日本語学』8月号　明治書院

2.堀口純子(1988)　「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」　『日本語教育』64号　日本語教育学会

3.水谷修(1979)　『話しことばと日本人』　創垢社

4.水谷信子(1983)　「あいづちと応答」　『話しことばの表現』　講座日本語の表現③　水谷修編　筑摩書房

5.水谷信子(1984)　「日本語教育と話しことばの実態－あいづちの分析－」『金田一晴彦博士希記念論文集　第二巻　言語学編』　三省堂

6.水谷信子(1983)　「あいづち論」　『日本語学』　11月号　明治書院

7.宮地敦子(1959)　「うけこたえ」　『国語学』　39集　国語学会

8. メイナード・K・泉子(1987)　「日米会話におけるあいづち表現」　『月刊言語』11月号　大修館書店

9.S.Makino and M.Tsutsui, "A Dictionary of Basic Japanese Grammar" ,The Japan Times,1986

10.T.S.Lebra, "Japanese Patterns of Behaviour" ,Honolulu,Hawaii University

Press, 1976

11. Senko K. Maynard, "Japanese Conversation: Self-Contextualization through Structure and Interactional Management", Norwood, N.J.: Ablex Publishers, 1989.

12. Senko K. Maynard, "An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies", The Japan Times, 1990

13. Victor H. Yngve "On Getting a Word in Edgewise" in "Chicago Linguistics Society", 6th, 1970